

大谷探検隊将来唐戸令残卷に関する一考察

田 衛 衛

——令文の復原と年代の比定を中心として——

はじめに

二〇世紀初めの大谷探検隊によってもたらされた将来品の一部は、当時の関東庁博物館、現在の旅順博物館（以下、旅博と略称）に移送され、現在に至るまで旅博で厳重に保存されている。二〇〇六年春、旅博は龍谷大学と共同プロジェクトを進め、同館所蔵の漢文古文書を共同で整理し、その成果を『旅順博物館藏新疆出土漢文仏経選粹』（以下、『旅博選粹』と略称）として刊行した。⁽¹⁾ 同書は一四〇〇枚以上の図版を収録しており、その多くは初出の貴重な古文書史料であった。初出古文書史料のうち、旅博「元編号」[LM20_1453_13.04]⁽²⁾ は「不明仏典」に分類され、定名は行われなままになっていた。⁽³⁾ 二〇一五年以降旅博と北京大学および中国人民大学は、共同で新疆出土漢文文献の再整理を行う、LM20_1453_13.04を再調査し、その結果、当該文書は唐の戸令残卷である可能性が指摘された。

筆者は整理小組の一員として文書の校訂を命ぜられて作業に当たってきた。本論文では、その初步的な成果を紹介し、専門の研究者の指正を仰ぎたい。

隋唐時代は律・令・格・式の完備した法律の条文が出現し、朝鮮半島や日本を含む東アジア諸国にも大きな影響を与えた。しかし、唐の令式格は、年月の流れの中で失われて伝世していない（唐律のみ『唐律疏議』によって伝存している）。

唐令の基本的な形を継承した『養老令』と『大宝令』、そして寧波にある天一閣所蔵の『天聖令』などから唐令の姿をわずかに覗い知ることができるが、唐令の本来の姿そのものではない。一方で、最近では敦煌トルファン地域から続々と唐代の古文書が出土しており、その中には唐令の写本も含まれている。とはいっても件数は多くはなく、「永徽東宮諸府職員令」⁽³⁾、「開元公式令」⁽⁴⁾、「台省職員令」⁽⁵⁾、「祠令」⁽⁶⁾断片などを数えるのみである。

唐令については、一九三〇年代以来、仁井田陞氏を初めとする各世

代の研究者らが、その復原のために尽力してきた。⁽⁷⁾とりわけ、近年『天聖令』が発見されたこと⁽⁸⁾によって中日の研究者が連携しつつ良好な成果を得つつある。

このような条件の下で、今回、旅博所蔵の「唐「戸令」断片」が発見されたことは、唐宋時代の戸籍政策や家族関係の解明に有用であるばかりでなく、唐令復元や唐令と日本令の関係などの問題を扱う上でも大きな価値があると考えられる。

一、断片の録文と欠文の推定

旅博蔵LM 20_1453_13_04断片(図1)は、文字は七行が残存しており、一行の文字数は不明で、原紙の大きさも明らかではない。現存する断片では各行三〜七文字を数える。字は楷書で書かれ、墨線欄があり、線は薄い墨色で引かれている。朱点等はなく、文字の訂正もない。

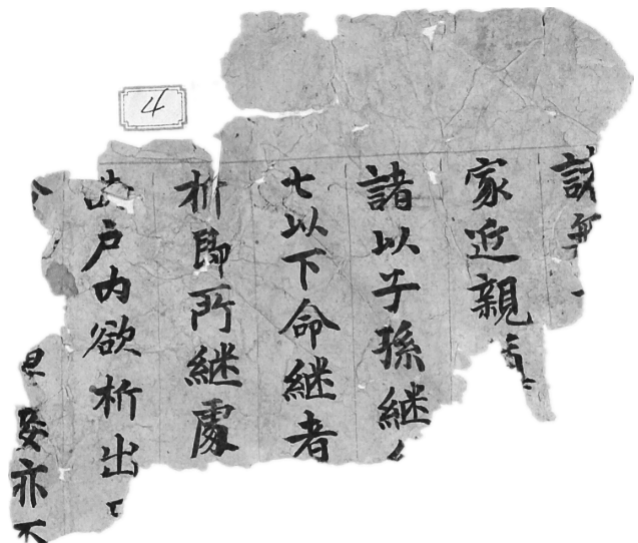
行論の便を図るため、録文を下に掲げる。

「旅博蔵唐「戸令」断片」の録文

(前欠)

- 1 諸無□「
- 2 家近親尊「
- 3 諸以子孫繼絶「
- 4 七以下命繼者「
- 5 析即所繼處「

図1 旅博蔵唐「戸令」断片



- 6 諸戸内欲析出□「
 - 7 □「妻妾亦不「
- (後欠)

天一閣蔵明版『天聖令』の末に附する唐令条文や日本令を見ると、それぞれの条文の冒頭には「諸」という文字を用い、条文ごとに改行している。この断片に見える条文は三条である。

本断片にみえる条文は『唐令拾遺』および『唐令拾遺補』にみえる復原唐令一四から唐一六に対応しており、断簡に見えている条文の排

列は、復原唐令と一致する。この断片は唐戸令の内容であるというこ
とは間違いない。

以下では『唐令拾遺』と『唐令拾遺補』による復原条文を揭示し、
そのうち本断簡に見える対応箇所を太字で示す。

一四【開二五】諸無子者、聽養同宗於昭穆相當者。……申官附籍。
（『唐戸婚律』卷十二、『文獻通考』卷十一）⁽¹⁰⁾

一五【開二五】諸以子孫繼絶應析戸者、非年十八已上、不得析、
其年十七已下命繼者、但於本生籍内注云年十八、然聽。即所繼
處有母在者、雖小亦聽析出。（『通典』食貨七・丁中、『文獻通
考』戸口考一・歷代口丁中賦役、及び『白氏六帖事類集』卷二
二、『白孔六帖』卷七）⁽¹¹⁾

一六【開二五】諸欲析出口為戸、及首附口為戸者、非成丁、皆不
合析、應分者、不用此令。（前掲『通典』、『文獻通考』）⁽¹²⁾

『唐令拾遺』の復原案では、この令文は開元二十五年令としている。
しかし、上掲の旅博所蔵の唐「戸令」に見える条文の字句は、『唐令
拾遺』の復原と完全には一致していない。そこで次に、復原条文と本
断片にみえる字句について、逐一検討していきたい。

（二）唐令復原一四「聽養」条

旅博所蔵断片の一行目は「諸無子」のみ残されており、『唐令拾
遺』の復原条文と一致する。しかし、次の行の冒頭には「家近親尊」
という『唐令拾遺』の復原条文に見えない文字が見える。『唐令拾
遺』は、条文を復原した際に、「聽養同宗於昭穆相當者」と「申官附

籍」の間になお不明の字句があるとして、「……」で表示しているが、
ここに「家近親尊」が入る可能性は高い。

唐宋の法典では、たとえば『名公書判清明集』卷八、戸婚門立繼類、
已立昭穆相当人而同宗妄訴（翁浩堂）条に、子孫がない場合の「家近
親尊」に関する規定が見える。

関連する記載は以下の通りである。

謹按令曰。諸無子孫、聽養同宗昭穆相當者為子孫。又曰…其欲繼
絶、而得絶家近親尊長命繼者、聽之。又曰。夫亡妻在、從其妻。⁽¹³⁾

『宋会要輯稿』礼三六之一六にも関係する事例が見える。

紹聖元年（一〇九四）十二月五日、尚書省言。元祐七年（一〇九
二）南郊赦書節文、「今後戸絶之家、近親不為依條立繼者、官為
施行。今戸絶家許近親尊長命繼、已有著令、即不當官為施行。」
從之。⁽¹⁴⁾

これによって、宋代においては、子孫がない者が養子縁組する状況
について条件を限定しつつ、「繼絶」と「夫亡妻在」の場合について
も規則を補充した。これによって、少なくとも紹聖元年には、「近親
尊長命繼」についての令文があったことがわかる。

『唐令拾遺』及び『唐令拾遺補』の復原解説によると、『唐令拾遺』
の「無子」条の復原に関する根拠は、唐「名例律」に見える「会赦改
正徵收」の条の疏議と、唐「戸婚律」にみえる「養子舍去」の条の疏
議に引用されている唐令である。そしてさらに『晋令』・『宋天聖

令』・『金泰和戸令』・『明戸令』なども参考にしている。それらの史料には、確かに「家近親尊」についての内容は存在せず、『宋会要輯稿』や『宋史』、そして『名公書判清明集』のような「家近親尊」に係する史料には、『唐令拾遺』・『唐令拾遺補』の復原条文を作成する際には注意を払われていない。

しかし、『名公書判清明集』巻八、戸婚姻立繼類にみえる「已立昭穆相當人而同宗妄訴（翁浩堂）」条のように、「其欲繼絶、而得絶家近親尊長命繼者、聽之」という条文は、「諸無子孫、聽養同宗昭穆相當者爲子孫」と同じく、戸令に属するはずである。これは、「無子聽養」の補充規定の条文と考えられる。従って、本断簡に見える「家近親尊」の残欠は、欠文を補うと、「其欲繼絶、而得絶家近親尊長命繼者、聽之。」であった可能性が高い。『名公書判清明集』に引用した「謹按令曰……」。又曰……」。又曰……」という形式にもとづき、ここに「夫亡妻在、從其妻」が存在した可能性がある⁽¹⁵⁾。

一行目の「諸無子」の後ろには、『名公書判清明集』では「諸無子孫、聽養同宗昭穆相當者爲子孫」と書かれる。一方で『唐律・名例』の「会赦改正徵收」条の疏議には「自無子者、聽養同宗於昭穆合者」と見える。また、『唐律・戸婚』の「養子舍去」条の疏議に引用した唐令には「無子者、聽養同宗於昭穆相當者」と見える。これらと日本令戸令14条の「凡無子者、聽養四等以上親於昭穆合者、即經本屬除附」とを突きあわせて考えると、日本令が唐令の用語を保存している可能性が高い。そこで、本稿の復原案は以下のように定める。

14 諸無子「者聽養同宗於昭穆相當者其欲繼絶而得絶」

家近親尊「長命繼者聽之」 申官附籍

断片に見える文字と比較しても、文字の大きさや字間距離は均しくないため、この断片では行の高さが同じであっても、一行の文字数は厳密には異なる可能性が高い。

(二) 唐「戸令」復原一五条「析戸」条

『唐令拾遺』では、以下の『通典』食貨七・『文献通考』戸口考一及び『白氏六帖事類集』巻二二と『白孔六帖』巻六七にもとづいて復原した。

『通典』巻七、食貨七、丁中

按開元二十五年「戸令」云：「諸以子孫繼絶應析戸者、非年十八以上不得析。即所繼處有母在、雖小亦聽析出。」⁽¹⁶⁾

『文献通考』巻十、戸口考一、歷代戸口丁中賦役

按開元二十五年「戸令」云：「諸以子孫繼絶應析戸者、非年十八以上不得析。即所繼處有母在、雖小亦聽析出。」⁽¹⁷⁾

『白氏六帖事類集』巻二二、析戸令条

「戸令」、諸子孫繼絶應以戸者、非年十八已上不得析。其年十七已下命繼者、但於本生籍内注云年十八、然聽。即所繼處有母在者、雖小亦聽析出。⁽¹⁸⁾

『白氏六帖』の記載を見ると、『通典』に引用されている「戸令」は、「其年十七已下命繼者、但於本生籍内注云年十八、然聽」という部分を省略したことが明らかである。それも「年十八已上」という条件の

ひとつを記しているに過ぎない。

幸いなことに、『白氏六帖』は、より文字数が多く完全な文章を保存していると推定され、『唐令拾遺』の復原条文は、『白氏六帖』に残されている史料を用いることで全文を補うことが可能になる。

仁井田氏の復原に「注云年十八、然聽。即所繼處」とされている部分は、旅博所蔵断片では、「析、即所繼處」となっており、「析」の一字がある。「聽」の後に「析」があれば、法文としてより理解しやすくなる。『唐律疏議』卷七衛禁「因事入宮輒宿」條「然後聽人」・同書卷二六雜律「校斛斗秤度不平」條「然後聽用」・『唐六典』尚書刑部卷第六刑部尚書侍郎「刑部郎中員外郎」條「至六載然後聽仕」・『天聖令』關市令唐25條「然後聽還」など用例が多いので、ここは「然後聽析」にしたほうがいいであろう。

次に母がいる場合の規定である「有母在」について見てみよう。

『通典』と『文献通考』は、ともに「有母在」となっているが『白氏六帖』では「有母在者」となっている。意味するところは変わらないが、『白氏六帖』に引用される唐「戸令」がより正確な文章であることを考えると、これも採用するべきであろう。

これらの考察にもとづいて、旅博所蔵断片のもたらす新たな情報を勘案すると、第一五条令文の復原は、以下のように改訂できる。

15 諸以子孫繼絶「應析戸者非年十八以上不得析其年十」

七以下命繼者「但於本生籍内注云年十八然後聽

析即所繼處「有母在者雖小亦聽析出」

(三) 唐令復元一六「為戸」条

『唐令拾遺』の「為戸」条の復原根拠は、『通典』食貨七、丁中と『文献通考』戸口考一、歷代戸口丁中賦役であり、『晉令』も参考になっている。

『通典』には、

諸戸欲析出口為戸及首附口為戸者、非成丁皆不合析。應分者、不用此令。

とあり、『文献通考』も同文である。

旅博所蔵断片の当該条文では、冒頭に「諸戸内欲析出口」と書かれ、『唐令拾遺』の復原条文と一致する。しかし、第二行目の行頭の三文字は筆画の一部だけが残存するが、四字目からは「妻妾亦不」という四文字がはつきり見える。この四文字は『唐令拾遺』の復原に用いられた史料には見えない字である。

ところで、『通典』には、「戸令」には「無夫者為寡妻妾」という規定があると明記している。これによって、「戸令」の中には寡妻妾に関する規則があることが判明し、『通典』の引用は不完全である可能性を指摘できる。

唐令を継受した日本令には、「寡妻妾」についての令文が見える。

『養老令』戸令12・13条

凡無子者、聽養四等以上親於昭穆合者、即經本屬除附。

凡戸欲折（析）出口為戸者、非成中男及寡妻妾者、並不合折（析）。應分者、不用此令。⁽²⁰⁾

『通典』と比較すると、「無子者聽養」と「寡妻妾析戸」という字句が『通典』にはない。日本令は、唐令にもとづいて修訂して作成しており、唐令の条文をそのまま用いている部分もあるが、自国の国情によつて修訂する場合もありうる。

ところが、『養老令』に見える、「非成中男及寡妻妾者、並不合析」という字句は、旅博所蔵断片の唐令の字句にみえる「非成丁皆不合析、寡妻妾亦不合析」と意味が同じで、ただ二文で書くか一文で書くかという違いしかない。

そのため、伝世文献の引用文字と日本令にみえる内容とを突きあわせた上で、旅博所蔵断片の内容を考え併せると、唐戸令一六条令文を下のように復原できる。

16 諸戸内欲析出口「爲戸及首附口爲戸者非成丁皆不」

〔合〕「析寡」妻妾亦不「合析應分者不用此令」

以上の考察をまとめて、旅博所蔵「唐令」断片の内容と形式を復原すると、以下の通りの唐戸令のうち三条の条文を復原できる。（行首の番号は『唐令拾遺』の対応条文に従う）

14 諸無子者、聽養同宗於昭穆相當者、其欲繼絶而得絶

…21字

家近親尊長命繼者、聽之。夫亡妻在、從其妻。申官附籍。

…21字

15 諸以子孫繼絶應析戸者、非年十八以上不得析、其年十

…22字

七以下命繼者、但於本生籍内注云年十八、然後聽

…20字

析。即所繼處有母在者、雖小亦聽析出。

…16字

16 諸戸内欲析出口爲戸及首附口爲戸者、非成丁皆不

…21字

合析、寡妻妾亦不合析。應分者、不用此令。

…16字

以上の考察によつて、旅博所蔵の断片が唐「戸令」であることが確定できる。この中には、今まで気付かれていなかった貴重な情報が含まれている。

本稿は、宋代に成書した『名公書判清明集』と日本令にもとづいて、完全な令文の条文を推定しており、補った文字はほぼ文書の一行の字数に相当する。これによつて、本断片から三つの唐令条文を復原し、仁井田陞氏以降のこの三つの唐令原文に対する復原の不足を補正できると考えている。それだけでなく、今後とも唐代における後令と前令の間の継承関係と修訂の行われ方、さらには日本令の唐令に対する取舍選択についても理解を深めることが可能になる。

二、旅博所蔵「唐令」残片の年代

唐は、高祖の武徳七年（六二四）から法令編纂を開始したとされるが、実態は隋の『開皇令』を継承したのみであった。太宗の貞観十一

年（六三七）に至って、天下が安定したため、はじめて唐王朝自らの『貞観令』を制定した。その後、高宗の永徽元年（六五〇）には、修正を重ねて『永徽令』を制定した。その後は、複数回の修訂を行っており、麟徳・儀鳳・垂拱・神龍・太極・開元の諸年間に修訂があったことが知られている。玄宗の開元三年（七一五）にも修正があり、開元七年（七一九）により大きな修正が行われ、『開元七年令』、すなわち『唐六典』が引用する令文を定めている。開元二十五年（七三七）になると、唐は律・令・格・式を全面的に修正し、「開元二十五年令」が成立した。⁽²¹⁾唐の制度は必ずしも一貫するものではなく、官名・時節・礼法はしばしば変更され、朝廷は時に詔勅の形式で新たな制度規則を公布した。また、ある程度の間において格の形式を用いてこれらを編纂し、令をより大規模に修正する時に追加・改正した。

史籍では令を複数回修正したとの記録があり、朝廷の勅書にも「著之於令」という表現がしばしば用いられるが、令の文言はより重要な法文書であり、通常は付箋を貼って元の条を貼り換える方式で訂正するのみで、⁽²²⁾全てを廃止して作り直すのではない。

唐令に関する大きな修正は主に上記の複数回あったが、『旧唐書』の刑法志と経籍志および『新唐書』の藝文志に記録された令は、『武徳令』・『貞観令』・『永徽令』・『開元七年令』・『開元二十五年令』だけであった。これらの改正では書籍の形にまとめ上げられたため、大きな改定だったことが分かる。一方で、改定された令はどれも三十巻に留まっていることから勘案して、令文の全分量に関する改正は多くなかったとも考えられる。

開元の後、令に対する大きな改定を行われなかったが、小さな修正は存在した。史書の記載によると、徳宗・宣宗の時にも改定が行われ

ている。これらの改定は大規模なものではなく、『建中令』や『大中令』のような書物は編纂されなかったようである。宋の目録書である『直齋書録解題』には『開元七年令』三十巻が記録され、⁽²³⁾『宋史』藝文志には『開元令』（開元二十五年令）三十巻が記録されている。⁽²⁴⁾前者は個人収蔵のものであり、後者は朝廷の館閣収蔵のものである。「開元二十五年令」は開元の後にあつて、公に法的効力がある図籍である。戴建國教授が天一閣で発見した宋の『天聖令』写本に保存されていた唐令は、開元二十五年令と考えられる。⁽²⁵⁾その中には中唐・晩唐の令文や建中令があるとする者もいる。⁽²⁶⁾中唐・晩唐時期において開元二十五年令に対する何らかの修正が入った可能性も十分にあるが、かといって開元二十五年令に代わるものではない。

以下では、このような視点にもとづいて旅博所蔵の唐令三条の字句の年代問題を検討してみたい。

（二）唐戸令復原一四「聽養」條

戸令一四条の条文については、『唐令拾遺』および『唐令拾遺補』では『唐律疏議』に基づいて開元二十五年令の、

諸無子者、聽養同宗於昭穆相當者、申官附籍。

という字句だけを復原している。現存する史料の中で旅博所蔵断片と一致するのは、『名公書判清明集』卷八戸婚門立繼類「已立昭穆相當人而同宗妄訴（翁浩堂）」条にみえる、

謹按令曰。「諸無子孫、聽養同宗昭穆相當者爲子孫」。又曰、「其

欲繼絶、而得絶家近親尊長命繼者、聽之。」

という文言である。⁽²⁷⁾現在、『名公書判清明集』の宋残本は日本の静嘉堂文庫に保存されている。この刊本は戸婚門の部分だけ残されていて、南宋理宗の景定辛酉歲年（一二六一）序が付いており、当該の部分は宋本『清明集』に見られる。⁽²⁸⁾明刻本は中国社科院歴史研究所宋遼金元史研究室によって北京図書館（現在の国家図書館）と上海図書館で発見されたもので、張四維による隆慶己巳年（一五六九）序が付いているものである。標点本は明本を底本として宋本を用いて補訂した成果にもとづき、一九八七年に出版された。前述の引用はこの標点本によるものである。陳智超氏は宋本と明本との詳細な比較対照を行い、⁽²⁹⁾前掲の判文は、宋本と明本の双方にあることが判明している。

『清明集』に残されている令文は翁浩堂の書判から出たものである。浩堂は名を甫、字を景山といい、理宗の宝慶二年（一二二六）に進士となり、処州の知州と浙西転運使を歴任した。そのため書判が書かれた場所はいずれも江南東路にあった。⁽³⁰⁾時期を勘案すると、翁甫が依拠した令は、理宗の時に編纂された『慶元令』である。宋令の編纂系譜はすでに整理されている。北宋の太宗の時に編纂された『淳化令』も、仁宗の天聖七年（一〇二九）施行された『天聖令』も唐開元二十五年令にもとづいたものである。『天聖令』残本の発見によって、その中の唐令によって改訂した宋令の条文と宋代にすでに不行としつつ保留された唐令の原文を含め、ほとんどの条文が開元二十五年令に由来することが確認できる。但し神宗元豐七年（一〇八四）に『元豐令』の編成から、篇目は三十卷から五十卷に増加し、内容的にも改められて唐令とは異なる体系を形成した。この編纂体系は後の『元符令』・『政

和令』・『紹興令』・『乾道令』・『淳熙令』・『慶元令』・『淳祐令』によって継続されている。現在『慶元条法事類』には『慶元令』の原文が多くみられ、『天聖令』と異なるところも多い。⁽³¹⁾一般的にいつて、翁甫が引いている宋令の文言は、直接に唐令と見なすことはできない。関連事例として、『宋会要輯稿』礼三六の一六に、次のような一文が見える。⁽³²⁾

紹聖元年（一〇九四）十二月五日、尙書省言。「元祐七年（一〇九二）南郊赦書節文「今後戸絶之家、近親不爲依條立繼者、官爲施行。」今戸絶家許近親尊長命繼、已有著令、即不當官爲施行。從之。」

この事例から、少なくとも北宋の哲宗の紹聖元年（一〇九四）の時には、「戸絶家許近親尊長命繼、已有著令」という令があったことは分かる。するとこの「著令」は『元豐令』の令文によるものと推測され、『元豐令』の新制である可能性も否定できない。但し、唐末五代期の戦乱や宋初に統治地域の縮小のため、『元豐令』がトルファン地域の高昌回鶻政権で通行していた可能性はない。旅博所蔵残片はトルファン地域から出たもので、唐代法令の残片の遺物であるとしか考えられないので、「戸絶家許近親尊長命繼」という条文は、その祖本も『元豐令』から『天聖令』を経て、更に唐令まで遡ることができる。日本令との関係を考えて、本条の規定は唐の『開元二十五年令』だけではなく、更に遡って『開元三年令』や『永徽令』まで遡る可能性が高い。

(二) 唐戸令復原一五「析戸」條

第一五條殘文の復原した文言は、いくつかの文字の転写における誤りを除いて、白居易の『白氏六帖事類集』が引用した文言とほぼ一致する。白居易（七七二—八四六）の時代からして、当時の令は開元二十五年令である。この条文が『通典』では省略されているのは、ここが「諸子孫繼絶應析戸者、非年十八以上不得析」、つまり十八歳以上の場合だけを言っているからである。後ろに続く「其年十七已下命繼者」の場合は、「於本生籍内注云年十八」すなわち十八歳になつてはじめて析戸することができることである。『通典』は文書を簡潔にするために、この部分を省略したのである。『通典』の関連文言は全て『白氏六帖』と一致し、またこれらの文言は『通典』では明確に開元二十五年令であると示されている。したがって、『白氏六帖』に載せられている条文は、『開元二十五年令』であることが確認できるのである。

『通典』はかつて宰相に任じられた杜佑によって編纂され、非常に信憑性の高い著書である。『白氏六帖』は私撰書であり、主として詩文の作成に参考されている。両者を比較すると、『通典』のほうが信憑性が高いとされている。過去の学者は『通典』が唐令を引く時に特別に開元二十五年令と表示するのを見ると、その令文が唐令の原文であると信じていたのである。

本稿では、この残片と『白氏六帖』による証拠とを加えて、『通典』が引用した唐令は一部省略がある場合もあることを確認した。すなわち、『通典』にない文言が開元二十五年令にもないとは限らないのである。

戴建国氏は、『通典』所載の唐令と宋『天聖令』に記されている唐

開元二十五年令とで異なるところを列挙された。例えば、

(1) 『通典』卷六「賦役下」「諸課役、毎年計帳至尚書省、度支配來年事。」は、「天聖令・賦役令」附唐令第1条では「諸課、毎年計帳至、戸部具錄色目、牒度支配來年事……。」となっている。

(2) 『通典』卷二「田制下」所載の開元二十五年令には「天聖令・田令」附唐令第5条にある職事官永業田を規定する「六品、七品各二頃五十畝、八品、九品各二頃」という文言はない。

(3) 『通典』卷四十「職官」に規定されている官品には「天聖令・雜令」附唐令第8条の「漕史」という品目はない。

(4) 『通典』では太史局曆生を「流外七品」とされ、それに対し『天聖令・雜令』附唐令第8条では「流外長上」とされている。⁽³³⁾

戴建国氏によると、これは『天聖令』が依拠した唐令が後唐で施行された時に部分的に改変されたか、あるいは『通典』を転写する時の錯誤かもしれない。⁽³⁴⁾しかし、『戸令』第一条のケースから見て、『通典』は唐令の原文を転写する時に、故意に文言を省略した場合もあることが判明する。『通典』編纂当時は令文自体が存在していたので、杜佑には令文の全てを『通典』に転写する必要はなかったのであろう。

(三) 唐戸令復原一六「為戸」条

前節で指摘したように、本条は仁井田氏が『通典』卷七「食貨七」「丁中」によって復原したもので、その原文は第一五・一六条が続いて抄録されている。⁽³⁵⁾

按開元二十五年「戸令」云。「諸以子孫繼絶應析戸者、非年十八以上不得析。即所繼處有母在、雖小亦聽析出。諸戸欲析出口爲戸及首

附口爲戸者、非成丁皆不合析。應分者、不用此令。」

前節で第一五条を検討した際に、『白氏六帖』に残されている全文と対照することによって、『通典』が引用した令文が省略される場合があることを確認した。ここで挙げる第一六条にも、省略が存在すると考えられる。日本の『養老令』、『令義解』、『令集解』に残されている唐令の文言に該当する部分を見ると、「非成中男及寡妻妾者、並不合析」とある。「寡妻妾」という言葉があるが、「非成丁」と合わせて「非成中男及寡妻妾者」と称されている。旅博所蔵残片は令文の原文を残してくれたのである。

(四) 小結

以上の考察をまとめると、旅博蔵断片の内容は、基本的に『唐令拾遺』復原開元二十五年戸令と『養老令』戸令に見えるもので、三条の令文の順序は一致しており、一条目と三条目の内容は、旅博蔵断片の方が多い。三条目は、『唐令拾遺』の復原に見えないものの、『養老令』に見える。従って、『開元二十五年令』と『養老令』はこの旅博蔵断片所載の令文を参考した可能性が高い。『大宝令』は唐『永徽令』を藍本として、日本の実況を参考の上に、八世紀の初めに藤原仲不比等によって施行された法典であり、その注釈書としては『古記』がある。今、その原本は失われ、一部引用された内容だけが伝存している。⁽³⁶⁾

『養老令』は『開元三年令』と『大宝令』により作られた法典で、その注釈書には「令釈」・「跡記」・「穴記」・「義解」などがある。これらは『古記』とともに『令集解』に見えている。『令集解』は八六八

年頃学者の惟宗直本が私撰した『養老令』の注釈書である。したがって、『令義解』と『令集解』が引用した令文は全て『養老令』から引いたものであるが、多少『大宝令』の内容も見えている。

以上の背景を考えれば、『大宝令』の「寡婦」から『養老令』の「寡妻妾」までに変更する原因は二つ可能性がある。一つは、『永徽令』が「寡婦」で、『開元三年令』は「寡妻妾」に変更したため、『大宝令』と『養老令』はこの変更に従って、「寡婦」から「寡妻妾」に修正した。もう一つは、元々は『永徽令』も『開元三年令』も「寡妻妾」であり、『大宝令』は当時の日本の状況によって、『永徽令』の「寡妻妾」を「寡婦」に書き直した。その後、『養老令』はまだ養老時代の新しい社会状況を考えて、『永徽令』と『開元三年令』を参考の上に、「寡婦」から「寡妻妾」に書き直した。戸令13条以外に、同じ戸令6条と23条と27条も「妻妾」に関する規定が見える。『養老令』戸令6条の注に「寡妻妾」は『大宝令』にも「寡婦」とする。⁽³⁸⁾

凡男女。三歳以下為黄。十六以下為小。廿以下為中。其男廿一為丁。六十為老。六十六為耆。無夫者。為寡妻妾。

『養老令』戸令23条について、補注には『古記』により「大宝令文には寡妻妾の「妾」字がなかった可能性が強い」とされている。⁽³⁹⁾

凡応分者。家人。奴婢。……寡妻妾無男者。承夫分。女分同上。

……
そして、ほかの条文にも「妻妾」に関する規定が見える。

『養老令』戸令27条（『岩波律令』補注27b、五六四頁）

凡先姦。後娶為妻妾。雖會赦。猶離之。

『養老令』儀制令25条（『律令』三四九―三五〇頁）

凡五等親者。父母。養父母。夫。子。為一等。祖父母。嫡母。繼母。伯叔父姑。兄弟。姊妹。夫之父母。妻。妾。姪。孫。子婦。為二等……夫前妻妾子。為三等……兄弟妻妾。再從兄弟姊妹。外祖父母。舅姨。兄弟孫。從父兄弟子。外甥。曾孫。孫婦。妻妾前夫子。為四等。妻妾父母。姑子。舅子。姨子。玄孫。外孫。女婢。為五等。

実は、日本の律令は、唐の律令の妻妾制度を継受しているが、現実には妻と妾の区別は不明確だった。それ故に、ここの『大宝令』と『養老令』の令文用語によって考えれば、古代中国律令によく見える妻妾尊卑規定の厳しい状況と異なり、古代日本令には「妻」と「妾」の区別がなじまなかったかもしれない。⁽⁴⁰⁾ 唐令では一貫して「寡妻妾」で、このような中国家族制度の根幹に関する用語が『永徽令』から『開元三年令』まで数十年間に変わる可能性が少なく考えられる。そして、もし『大宝令』も『養老令』戸令27条や儀制令25条と同じく、「妾」に関する規定があれば、全文の統一のため、『養老令』は『大宝令』の「寡婦」から「寡妻妾」に書き直す必要もあると考えられる。そのため、「寡婦」から「寡妻妾」に変更する原因は、後者の可能性が高いであろう。即ち、『大宝令』では、唐令の「寡妻妾」を「寡婦」に改めて、『養老令』はまだ「寡婦」から「寡妻妾」に改めた。⁽⁴¹⁾ 前文によつて考えれば、旅博所蔵残巻は『永徽令』あるいは『開元三年令』である可能性がある。『大宝令』の藍本は『永徽令』であり、『養老令』は『大宝令』を基礎として、『開元三年令』を参考した可能性があるという状況で完成したもので、⁽⁴²⁾ 『大宝令』も『養老令』も基礎になっているのは『永徽令』であるといえる。今までトルファンから出土した唐代律令文書には永徽時代のもものが多いので、これは

『永徽令』である可能性が最も高いであろう。⁽⁴³⁾

三、旅博唐令写本の性質

現在見られる唐令の原本は、敦煌で発見された『永徽東宮諸府職員令残巻』(P.4634+P.4634 C2+P.4634 C1+S.1880+S.3375+S.11446)、『開元公式令残巻』(P.2819)、『台省職員令』と『祠令』残巻抄本(Ⅱ X.3556)である。後者二種は類抄であり、前者二種はそれぞれ「職員令」と「公式令」である。

『永徽東宮諸府職員令』の裏の紙の継ぎ目には「涼州都督府之印」の印影が見え、巻末の題記と合わせて見ると、沙州の吏人が涼州都督府で抄写した文書であることが分かる。⁽⁴⁴⁾ 当時、律令格式だけでなく開元道藏なども十道の首府で転写されて各州に送られている。⁽⁴⁵⁾

『職員令』は、その書写の様式に特色がある。まず、職員令の所属部門を行の頭から書き、そして行を改めて行頭から当該部門に所属する職員の名称及び人数を書く。職員の名称及び人数は全て官位の上下順序によつて書き、そして各条の後ろに二行の註を附して職員の執掌を説明する。所属部門が異なるが職員名称と職掌が同じである場合は註を省略する。

『開元公式令』は紙の継ぎ目の裏側に「涼州都督府之印」が捺されており、⁽⁴⁶⁾ 涼州で転写してきたことが分かる。形式も官文書の形で転写されており、一般的な「諸」から始まる令文の形式とは異なる。

しかし、旅博所蔵の唐戸令残片は各条の内容が終わると、次の行の行頭に「諸」ではじまる条文を書いている。こうした形式は既存の格や式またはその他の官文書の中でも見えるが、旅博所蔵の残片は令の

書き方を表している。旅博所蔵の戸令残片は残存部分が少ないため、二行の註が見つからなかったのである。『東宮諸府職員令』を見ると、令文は巻ごとに書写され、各巻の後ろに題記が書写されていた可能性が高い。

書法から見て、『東宮諸府職員令』と『開元公式令』の文字は立派で堂々としており、官印も押されていて、正式な官府の定本と考えられる。旅博所蔵残片の書写は精緻とは言えず、形式もそれほど厳密ではない。従ってこの西州写本は、涼州で転写された正本とは異なり、再度転写された地方の官方文本であるのかもしれない。とはいえ、書のレベルはそれほど高度ではないものの、字の構造はしっかりしていることから、官府の書吏が立派に書写した唐令の正本をもとに転写されたもので、現地の官府の行政部門で用いられたと考えられる。

いずれにしても、『開元三年令』の当時の様子がうかがえる。明抄本『天聖令』は開元二十五年令の内容を保存したが、書き方の様式は唐の写本本来の形は留めていない。

おわりに

律令の主要部分である、戸令と田令、賦役令は共に民政を規定する主軸であり、晋令以降、唐宋の令文の中に必ず存在するものであり、編目の名称すら変わったことがない。律・令・格・式を備える律令体系は、古代東アジアに共通する統治形式であり、これまでも研究者たちの注目を集めてきた。戴建國氏が天一閣所蔵の『天聖令』を発見してから、唐宋律令に関する研究はさらに高度な次元に入っている。

本稿では、旅博所蔵の大谷文書の中から発見された唐戸令残片を取

り上げ、残片の文本を復元して令文を補完した。ついでその年代が開元三年令であることを確認し、開元三年戸令の条目のうち、三条を完全な形で復元し得た。そして残存する僅かな文字の内容を整理することで、唐令を復元する時、そして日本令が唐令を取捨選択する時の考えを考究する上で絶好の事例をなり得ることを提示した。考察が未熟な点も多々あるが、全て今後の課題とし、諸賢のご叱正を乞う次第である。

〔付記〕 本稿は、旅博・中国人民大学国学院・北京大学中国古代史研究中心による共同研究「旅博蔵新疆省出土漢文文書の整理與研究」プロジェクト（教育部人文社会重点研究基地北京大学中国古代史研究中心重大項目）による成果である。執筆にあたっては、研究プロジェクト・東洋文庫内陸アジア出土古文獻研究会・律令制研究会（代表者は大津透先生）をひきいる先生方や若手の方々から多くのご教示を得た。ここに特に記して感謝申しあげたい。

註

- (1) 旅順博物館・龍谷大学主編『旅順博物館蔵新疆出土漢文仏經選粹』（日文版は『旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典断片選粹』、法藏館、二〇〇六年。
- (2) 『旅博選粹』、一三二頁
- (3) 図版及び録文はT. Yamamoto, O. Ikeda, & Y. Okano, *Tun-huang and Turfan Documents concerning Social and Economic History*, 1. Legal Texts, Tokyo: The Toyo Bunko, 1978-1980, (A), pp.22-28, (B), pp.40-50; T. Yamamoto et al., *Tun-huang and Turfan Docu-*

ments concerning Social and Economic History, Supplement, Tokyo: The Toyo Bunko 2001, (A), p.3, (B), pp.2-3. 劉俊文『敦煌吐魯番唐代法制文書考釈』、中華書局、一九八九年、一八〇—一九七頁参照。

- (4) 榮新江・史睿「俄藏敦煌寫本『唐令』殘卷Ⅱ₃₅₅₈考釈」、『敦煌學輯刊』一九九九年第一期、三一一—三頁。

- (5) 図版及び録文はT. Yamamoto, O. Ikeda, & Y. Okano, *Tun-huang and Turfan Documents concerning Social and Economic History*, 1 Legal Texts, A, pp.29-31 (B), pp.55-60. 劉俊文『敦煌吐魯番唐代法制文書考釈』、三一一—三二八頁参照。

- (6) 榮新江・史睿「俄藏敦煌寫本〈唐令〉殘卷Ⅱ₃₅₅₈考釈」、『敦煌學輯刊』一九九九年第二期、三一一—三頁。李錦繡は祠令断片ではなく、祠部の「格式律令事類」であると指摘した(李錦繡「俄藏Ⅱ₃₅₅₈唐「格式律令事類・祠部」殘卷試考」、『文史』二〇〇二年第三期、一五〇—一六五頁)。これに対しては、榮新江・史睿の反論がある。榮新江・史睿「俄藏Ⅱ₃₅₅₈唐代令式再研究」、『敦煌吐魯番研究』第九卷、中華書局、二〇〇五年、一四三—一六八頁。『格式律令事類』についての議論は土肥義和「唐考課令等写本断片(Ⅱ₃₅₅₈)」考——開元25年撰「格式律令事類」に關連して」も参考(『國學院雜誌』一〇五・一二、二〇〇四年、一一二頁)。

- (7) 仁井田陞『唐令拾遺』、東京東方文化研究院、一九三三年(中文訳は仁井田陞著・栗勁他編訳『唐令拾遺』、長春出版社、一九八九年)。仁井田陞著・池田温編『唐令拾遺補』、東京大学出版会、一九九七年。以下、『唐令拾遺』『唐令拾遺補』と略称。

- (8) 天一閣博物館・中共社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組『天一閣藏明鈔本天聖令校證・附唐令復原研究』、中華書局、二〇〇六年。関係する研究が、以下に示す雑誌・書籍において集中的に出版されている。榮新江主編『唐研究』第一二巻及び第一四巻(北京大学出版社、二〇〇六と二〇〇八年)、大津透編『日唐律令比較研究の新階段』、山川出版社、二〇〇八年。台師大歴史系・中国法制史学会・唐律研究読会主編『新史料・新観点・新視角 天聖令論集』(上下)、元照出版公司、二〇一一年。黃正建主編『天聖令』與唐宋制度研究、中国社会科学出版社、二〇一一年。岡野誠ほか『天聖令研究的新動向——『唐研究』第一四巻(天聖令特集号)に対する書評を中心として』、『法史学研究会会報』第一四号、二〇〇九年、一〇四—一三〇頁。

- (9) 写真版を發表できることについて、旅博に感謝する。

- (10) 『唐令拾遺』、二三三頁、『唐令拾遺補』五二八—五二九・一〇二〇頁。以下の三条文は両書に依拠するが、句読点を改めた箇所がある。

- (11) 『唐令拾遺』二三四頁、『唐令拾遺補』五二八・一〇二〇頁。

- (12) 『唐令拾遺』、二三三頁、『唐令拾遺補』一〇二〇—一〇二二頁。

- (13) 中国社会科学院歴史研究所宋遼金元研究室点校『名公書判清明集』卷八、中華書局、一九八七年、二四七頁、高橋芳郎「訳注『明公書判清明集』戸婚門」創文社、二〇〇六年、四七—四七三頁。

- (14) 『宋会要輯稿』、上海古籍出版社、二二〇四年、一五四八頁。『宋史』卷一二五礼制第七八、中華書局、一九八五年、二九三五頁も参照。

- (15) 一般的に「又曰……」。又曰……」——という言い方は複数の条文を指す（黄正建先生の御教示による）。ここでは断片の様式によつて一条に復原する。
- (16) 『通典』卷七「食貨七」丁中條、中華書局、一九八八年、一五五頁。
- (17) 『文献通考』卷十「戸口考一・歷代戸口中賦役」、中華書局、二〇一一年、二八〇頁。
- (18) 『白氏六帖事類集』卷二二、文物出版社、一九八七年影印傳增湘舊藏南宋紹興刻本、帖冊五、葉六十五背。『白孔六帖』卷七六。
- (19) 『通典』卷七「食貨七」丁中條、一五五頁。
- (20) 井上光貞ほか校註『律令』（日本思想大系3）、岩波書店、一九七六年、二二頁。
- (21) 池田溫『唐令と日本令——『唐令拾遺』編纂によせて』、『中国礼法と日本律令制』、東方書店、一九九二年、一六五—一九四頁。中文訳は霍存福・丁相順訳、王冰校『唐令與日本令——『唐令拾遺補』編纂集議』、『比較法研究』一九九四年第一期、九六頁。
- (22) 詳しいのは戴建国『唐宋變革時期的法律與社会』第二章「唐宋法典修訂方式和修纂体例的傳承演變」を参照（上海古籍出版社、二〇一〇年、九七—一三五頁）。同「天一閣藏『天聖令・賦役令』初探」（下）、『文史』二〇〇一第一輯、一七六—一八一頁も参照。
- (23) 陳振孫『直齋書錄解題』、上海古籍出版社、一九八七年、二三三頁。
- (24) 『宋史』卷二百四「藝文志」一五七「李林甫開元新格十卷。又、令三十卷。」（中華書局、一九七七年、二三四—一頁）
- (25) 戴建国「天一閣藏明鈔本『官品令』考」、『歷史研究』一九九九
- 年第三期、同著『宋代法制初探』に收入、黑龍江人民出版社、二〇〇〇年、四六七—四七〇頁。戴建国「『天聖令』所附唐令為開元二十五年令考」、『唐研究』第一四卷、二〇〇八年、九二—一八頁。坂上康俊「『天聖令』藍本唐令的年代推定」、『唐研究』第一四卷、二九—三九頁。「再論『天聖令』藍本唐令『開元二十五年令』說」、『新史料・新觀點・新視角 天聖令論集』（上）、五三—六四頁。
- (26) 黄正建「『天聖令』附『唐令』是開元二十五年令嗎？」、『中国史研究』二〇〇七年第四期、九〇頁。「『天聖令』附『唐令』是否為開元二十五年令」、黄正建主編『『天聖令』與唐宋制度研究』、中国社会科学出版社、二〇一一年、四八—五二頁。盧向前「『天聖令』所附『唐令』是開元二十五年令嗎？」、湯勤福主編『歷史文獻整理研究與史學研究方法論』、黃山書社、二〇〇八年、八二—一〇六頁。盧向前・熊偉「『天聖令』所附『唐令』為建中令辯」、袁行霈主編『国学研究』第二二卷、北京大學出版社、二〇〇八年一月、一—二八頁参照。
- (27) 中国社会科学院歷史研究所宋遼金元史研究室点校『名公書判清明集』卷八、二四七頁。
- (28) 『宋本名公書判清明集』、『続古逸叢書』上海涵芬樓景印東京岩崎氏靜嘉堂藏本37、上海商務印書館、一九三五年、四葉右至五葉左。『名公書判清明集』、古典研究会影印本、一九六四年、二〇頁。
- (29) 陳智超「宋史研究的珍貴史料——明刻本『明公書判清明集』介紹」、中国社会科学院歷史研究所宋遼金元史研究室点校『名公書判清明集』附錄七、六四九頁。
- (30) 注(29) 前掲論文、六八—二頁。
- (31) 梅原郁「唐宋時代の法典編纂——律令格式と敕令格式」、『中国

近世の法制と社会」、京都大学人文科学研究所、一九九三年、一
二二―一二頁。滋賀秀三「法典編纂の歴史」、『中国法制史論集
——法典と刑罰』、創文社、二〇〇三年、一〇三―一二頁。戴建
国『唐宋変革時期的法律與社会』六四―六九、一八一―二一九頁。
川村康「宋令変容考」、関西学院大学法政学会編『法と政治』第
六二卷第一号（下）、二〇一一年、四五九―五七三頁。趙晶中訳文
『宋令演變考』（上下）、載徐世虹主編『中国古代法律文献研究』
第五輯、社会科学文献出版社、二〇一一年、二二二―二五〇頁。
第六輯、二〇一二年、一六九―一七三頁。趙晶『「天聖令」與唐宋
法制考論』、上海古籍出版社、二〇一四年、一三一―一二頁など参
照。

- (32) 『宋会要輯稿』、上海古籍出版社、一九五七年、一三一―一六頁。
- 『宋史』卷一二五、中華書局、一九八五年、二九三五頁参照。
- (33) 黃正建『「天聖令」（附雜令）』所涉唐前期諸色人雜考、『唐研
究』第一二卷、二〇〇六年、二一五頁。
- (34) 戴建国『「天聖令」所附唐令為開元二十五年令考』、『唐研究』
第一四卷、二〇〇八年、九一―二八頁。
- (35) 『通典』卷七『食貨七』丁中条、中華書局、一九八八年、一五
五頁。
- (36) 坂上康俊「日本に舶載された唐令の年次比定について」、『法史
学研究會会報』一三三、二〇〇八年、一―二四頁。中文訳は坂上
康俊「日本舶來唐令的年代推斷」、韓昇主編『古代中國・社会転
型與多元文化』、上海人民出版社、二〇〇七年、一六八―一七五頁。
服部一隆氏は『養老令』は『開元二十五年令』の方に近いと指摘
する。服部一隆「養老令と天聖令の概要比較」、明治大学古代学

研究所編『古代学研究所紀要』第一五號、二〇一一年、三三―四
六頁。

- (37) 井上光貞「日本律令の成立とその注釈書」、『井上光貞著作集』
第二卷、岩波書店、一九八六年。榎本淳一「養老律令試論」、笹
山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集』上卷、吉川弘文館、
一九九三年。

- (38) 『岩波律令』、二二六頁。
- (39) 『岩波律令』、五六二頁。
- (40) 『岩波律令』、五六四頁。
- (41) とすると、『養老令』16条に残されている「寡妻妾」という文
言も同じ状況である可能性が高い。
- (42) 開元三年令によって書き直したという例は殆んど見えない。
- (43) この問題について、東京大学留学中の指導教員である大津透教
授より多大な御指導を賜った。感謝を銘記する。
- (44) 図版・録文は *Tun-huang and Turfan Documents concerning So-
cial and Economic History, I. Legal Texts, (A), pp.22-28, (B), pp.40-
50; Tun-huang and Turfan Documents concerning Social and Eco-
nomic History, Supplement, (A), p.3, (B), pp.2-3*。劉俊文『敦煌
吐魯番唐代法制文書考釈』、一八〇―一九七頁参照。
- (45) 榮新江『唐西州の道教』、季羨林等主編『敦煌吐魯番研究』第
四卷、北京大学出版社、一九九九年、一三九頁。
- (46) *Tun-huang and Turfan Documents concerning Social and Eco-
nomic History, I. Legal Texts, (A), p.29*。
- (47) 瀧川政次郎「戸令総説」、皇學館大学人文学会編『皇學館論
叢』九五、一九七六年、二頁。